

# 電子学術書をどう創造するか

電子出版時代の知のコミュニケーションの形を求めて

京都大学学術出版会 鈴木哲也

## I. はじめに：学術コミュニケーションの変化と「学術出版業界」の問題点

### 1 "publish or perish"あらため"publish and perish"の時代

——研究・教育の在り方の変化とメディアの多様化

#### 1) 研究の観点から

[1] 急速に増大する発表論文数

[2] 研究成果自体の多様化

細分化の中で

組織化の中で

[3] 成果発表の多様化——オンライン化，オープンアクセス，そして電子書籍

#### 2) 教育の観点から

[1] 大学院重点化と大学院教育，中等学校の変化と学部教育の変化

[2] 既存教科書が通用しない時代，欧米型の本格的 **overview** が必要に

### 2 疲弊する学術出版

1) 増え続ける「出版」へのニーズ ←刊行点数と大学出版部の増大の最大要因

[1] 学術書のクオリティの低下

編集無き，読者無き「原稿を右から左」の出版→研究者の「学術書」ばなれ

[2] 出版ニーズを利用した，低質のビジネス

2) 本格的な自習書テキストの欠落

欧米には，良い自習書がたくさんあるのに

[1] 「短小軽薄」と適合的な大規模流通としての書籍市場

[2] 出版社の企画能力の低下

→研究者の執筆意欲の低下も ←「本が業績にならない」時代

3) 第一義的研究の等閑視

若手研究者のデビューの機会を阻む構造

4) 既存パラダイムからの脱出の展望を見いだせていない学術出版

5) 最も深刻なのは.....?

## II 学術「情報」電子化の光と影

- 1 学術成果は「情報」ではない——総合性・体系性の軽視の危険性
  - ・国文学界の「自己批判」 国文学データベースの功罪
  
  - ・「ネットカルチャー」と「アカデミックカルチャー」
- 2 学術コミュニケーションの狭域化と寡占化
  - “Survey Finds Citations Growing Narrower as Journals Move Online”
  - “Electronic Publication and the Narrowing of Science and Scholarship”
  - (Science 2008年6月18日号)
- 3 情報を「身体化」させる課題（教育）の未確立
  - 「フローとしての知」の登場
  - 情報を利用する方法論とセンスをどう育てるか？
- 4 最大の懸念は人材とスキル
  - 1) 実は「紙の本」の総コストは非常に小さい  
『わくわく理学』（マルチメディア本）／『西洋古典学事典』電子版の経験から
  - 2) 電子出版「低コスト」言説がもたらすメディア全体の「貧困化」の危険
  - 3) 人材と新しい手法の開発が急務

## III 「学術編集」の時代——知のコミュニケーションの再構築のために

- 1 原理的な問い直しと学術編集の要点・技法
  - 1) 「新しい学術コミュニケーション」の要件
  - 2) 研究、教育の目的に応じた編集コンセプト
    - ・領域を越えた、認識論的、方法論的なインパクトを狙うなら
    - ・精密な方法論的トレーニングなら
    - ・社会全体としての知の普及を目指すなら
  - 3) 読者を措定した、「一冊（一卷、一編）としての統合度」
- 2 電子書籍化の前提：コンテンツの性格／技術適合性に応じたメディアの選択
  - ・「紙の本」が有効であり得るもの
  - ・紙であることによる限界があるもの
  - ・紙である必要のないもの
  - ・紙でないことによって公開が可能になるものも

## IV 『わくわく理学』『西洋古典学事典電子版』『グリッド都市』の経験から

- 1 コンテンツの紹介
  - ・『わくわく理学』（iPad アプリ 2011年4月）：

高校生向けに本学理学研究科の研究内容を紹介する  
初学者が直感的に研究概要を理解出来る動画（30 数本）  
専門用語をタッチするとポップアップするグロッサリー

- ・『西洋古典学事典電子版』（iPad アプリ 2013 年 12 月を予定）：  
神話伝説から歴史，宗教，文学，哲学，美術，政治，衣食住から性生活に至るギリ  
シア・ローマ世界に関連する事項を詳細に解説した「読む事典」の電子版約 15000  
の登場事項について横断検索可能 系図や地図も表示
- ・『グリッド都市』（2013 年 2 月）  
スペイン帝国の植民都市研究。重要図版に QR コードを付し，スマートフォン等  
を経由して，京都大学地域研究統合情報センターのデータベース所蔵の関係視覚資料  
等につなぎ，インタラクティブな理解を促す。

## 2 何故タブレット（iPad）アプリなのか

- ・電子出版におけるプラットフォームの問題
- ・画面サイズや可読性  
「学術書を読む」という行為に独特の認知的なスタイル
- ・コンテンツ販売チャンネルとしての性格
- ・B to C モデルであることの重要性（誰を購買者に想定したプラットフォームか）  
B to B は「本が売れない」ことを無自己批判に前提。

## 3 コンテンツ作りの問題点

- 1) マルチメディアコンテンツのノウハウの不足  
たとえば，動画の内容をどうするか？
- 2) 紙の本とは比較にならない高コスト  
実際には，B to C モデルには遠い
- 3) テキストの確定性の問題  
制作過程での「最大の衝撃」を受けたのは，

## 4 販売と販促

- 1) 「紙の本で言えば，ナショナルチェーン一つ分」？
- 2) 学術というセグメンテーションを活かせない市場構造
- 3) 「無料の時代」にどう価格を付けるのか

## 5 当面の電子出版モデル

- 1) 「電子ならでは」に絞り込んだ新刊コンテンツ開発
  - ・フィールド研究でのツールとして役立つ資料採取のプロトコル集
  - ・実験系・認知科学系テキスト

- ・辞書・事典
- ・現物にアクセスし難い貴重資料 等です。

2) 英文書

英語人口という国際的な市場を見据えれば、英文書の新刊はあり得るか。

3) 紙の補完としての電子出版

- ・アクセシビリティの点でも
- ・紙の書籍の販売の補完としての電子書籍

4) 外部資金モデルとしての教材開発：関係セクターの共同の重要性  
コンテンツの供給 人材の供給と育成 コストと資金調達